後を追はれたのも亦奇しき因緣といはねばならぬ。殊に大正三年四月東宮御學問所の開設せられるや、先生はその評議員に選ばれたのであつたが、その職員は總裁東郷元帥以下殆んど全部海陸の軍人であつたから、先生はその間に立つてこの重職に當られるに臨み、濱尾子爵をも評議員に加へられんことを望まれたのであつたが、幾何もなく波多野東宮大夫が宮内大臣に轉じ、子爵が代つて東宮大夫に任ぜられるに及び、おのづから子爵は副總裁の重任に就かれることになつて先生の希望も達せられ、相倚り相扶けて東郷元帥の兩翼となり、以て樞機に參劃し、御學問所の中樞となつて帝王學御教導の重責に任じたことは、一面二人の交友を飾る一場面でもあつたのである。而して御學問所の評議員會の日などには、會議が果てゝ諸員退散した後でも、兩先生は居殘つて御學問所の事や大學の事などに就て、何くれとなくよく相談せられ、殆ど時の移るのも知らなかつた位であつたといはれる。その如何に兩々相許してゐたかゞわかるであらう。

兩先生は何か公務上の事件が起れば、必ず互に一應相談し合はされたやうである。或は書面を以てし、或は電話を以てし、又或は直接訪問し合つて、互に意見を交換せられた。二人が電話で話される場合、それは餘人の想像以上に長時間を要した。山川家では濱尾家より電話がかゝつたといふと、何時でも先づ椅子を電話室に運んで、然る後に先生に取次いだといふことである。更に濱尾子の山川家訪問に至つてはまたノンビリしたもので、凡そ訪問の時間的レコードも造り兼ねまい有樣であつた。

濱尾先生の訪問會談が長びいて正午に近づくと濱尾先生は「ぢや山川さん」と椅子を離れようとする。すると先生は「御飯をどうぞ」と勸められる。勸められるまゝに濱尾先生は先生と晝食を共にすると、「それぢや山川さん」と再び椅子に腰を下し、二人の會話が結ばれると、再び話は滾々として盡きず、間もなく夕景に至るや更に晩餐を共にし、何時おゝ歸りになるのか頓と見當がつかないといふ有樣であつた。やがて午後九時にもなる頃、子爵の歸りを告げる先生の聲に玄關番がやつと安堵の思ひをして之を迎へると、二人は玄關式臺に出てからも更に話題を新にし、その話がまたしばし續いたと言はれる。以て二人の交誼の啻ならなかつたことが推察せられるであらう。

山川先生と乃木將軍　乃木將軍が日本主義の權化、日本武士の活典型にして、質實剛健、至誠忠實、皇室及び國家の擁護者としてその比儔なき人格は餘りにも有名である。而して山川先生は武人ではなかつたけれども、その精神に於て、その主義に於て、その行動に於て、乃木大將と寔に多くの類似點を發見する。更に兩者の面貌と風骨とを比較すれば、共に眼光爛々と輝き稍〻痩身にして筋肉緊り、何處となく慓悍の氣漲つてゐる邊りは、これまた甚だ類似する所があると言はねばならない。先生が「フロックコートを着た乃木將軍」と稱せられ、乃木將軍はまた「軍服を着けた山川男」だと言はれる所以も、全く兩者の主義・性行が一致してゐたからである。この教育家として比類なき二大偉人が明治の末葉に於て、一は學習院長として、一は九州帝大總長として東西に並んで子弟の薫陶に當つた

ことは、蓋し我が教育界の一大偉觀であつたのである。

先生と乃木將軍とはその職務を異にした所から、將軍の存命中には格別なる親交とてはなかつた。世間からは教育界の二大明星として仰がれ、その人格・性行・容貌の類似を以て喋々せられたけれども、個人的にはたゞ一通りの面識の間柄に過ぎなかつたのである。然し大正元年九月將軍の殉死によつて、先生の將軍への敬慕の情は一層加はつて行つた。山川家の一書生が將軍の自殺を耳にして、「大變惜しいことをしたものです」と申した處、先生は卽座に「お前は吾輩の家に何年飯を食つてゐる。」と言つて之をたしなめられた。先生は旣に深く乃木將軍の心中を察して、その殉死の氣持をよく諒解してゐられたのであつた。

先生は容易に人に許さぬ方であつたが、乃木將軍には感服してゐられた。將軍自殺の後、博多の九州日報新聞に載せられた左の談話によつて明かにするを得るであらう。

乃木さんは實に完全な人間であつた。その表裏のない事は到底餘人の模倣し得ない所である。吾々も出來るだけ表裏なきやう努めてゐるが、迚もあの通りには行かない。例へば自宅にあつて客に接する時は、袴を着けて面會するけれども、その人去れば復た舊の如く袴を取つて了ふ。然るに乃木さんは內も外も終始一貫して獨を愼むといふ點は、實にどうも偉いものである。自分は乃木さんとは親交はないが、一面識の間柄であり、且つ議會開會中屢〻電車の中で將軍の姿を見受けた。今も尙諒解し得ないことは、乃木さんが電車の中に入らず、何時も車掌臺に立つて居られたことである。市內電車のことは知らないが、山の手線や中央線では、未だ曾て車內で見たことはなかつた。定めて何か深い理由あつての事であらう。予が將軍に親炙せし人より聞く所によれば、彼の旅順攻圍の際、朝北の寒氣凜冽なるにも拘はらず、六十に垂んとする乃木さんにして、陣中に火を近づけなかつたといふに至つては、到底常人の企て能はざる所であらう。云々

先生が乃木大將の人格に敬服せられたことは右の談によつてもわかるであらうが、後年中央教化團體その他の關係で國民教化運動に專念せらるゝやうになつた際、その好んで用ひらるゝ演題は、「武士道」と共に實に「乃木大將の殉死」といふことであつた。而して乃木將軍の心事を述ぶるに當つて、先生は獨自の研究に基いて「心約」といふ卓說を述べて、將軍の殉死を解釋せんと試みられた。今之を要言すれば、凡そ人間の約束には大體四種類がある。先づ一番嚴しいのが文書を以て約束する證約などでも申すべきものである。次に口約卽ち口約束である。第三に默約又は默契とでも言ふべきもので、之は約束する事柄を兩方の當事者が共に口に出さず、以心傳心を以て互に約束するものである。而して第四としては之に反して些かも相手方に約束のことを知らさず、自分許りで心の內で約束する場合である。此を先生は心約と名付けられた。默契の場合は前後の言葉などから所謂以心傳心で、約束する人の意思が約束を受ける人に判つてゐるのであるが、心約の場合は、約束する事柄は約束する人のみ知つて、相手方の人にもその他の人にも全く知れないのである。故に心約は之を果さなくともいゝ

といふ誘惑が最強く、之を果す人は克己心の強い人でなければならない。乃木大將は旅順の攻擊に當つて幾萬の將士を戰死せしめ、上　陛下を初め下はその父兄に會はせる顏がないと考へられ、自ら死を覺悟せられたのである。然し戰爭の當時に、乃木將軍だけが自殺したのでは、大山總司令官初め他の將軍達が恥をかゝねばならぬ。これは將軍として執るべき手段ではない。乃ち將軍はその機會を窺つてゐられたのである。乃木大將の旅順陷落後の作に成れる詩に次の如きものがある。

皇師百萬征二强虜一　野戰攻城屍作レ山
愧我何顏看二父老一　凱歌今日幾人還

大將は斯の如く衷心戰死者の父老に合せる顏がないとて愧ぢて居られた。而して窃に自分も必ず近い中に死なうといふことを部下に對して心約して居られたのである。大將の殉死は實にこの心約を果すべき好機を掴まれたのであるといふ說である。以上の如く先生は將軍の心理を實によく理解して居られた。誠に先生の如き偉人にして初めて將軍の如き偉人の心理を識るといふべきである。

ハイカラと蠻カラ　山川先生が質素そのものゝ生活を送られたことは先に述べた所である。然るに若い時分は新知識の所有者として、却々のハイカラであつたのである。明治二十年前後の頃、先生は同僚と共に乘馬に熱中してゐられたが、或日向島で落馬して一晩歸宅することが出來なかつた。幸ひ怪我は輕微であつたが、それからは乘馬はプッツリ廢めて、その代り自轉車乘りを始められた。その頃の自轉車は今時のタイヤと違つて、中に空氣が入つてゐない堅いゴム輪の車であつた。先生は毎日これに乘つて、小石川初音町から本郷の大學まで二ヶ年位通はれた。然るに或時先生は自轉車を本郷菊坂の交番にぶッつけて、新聞記事を賑はしてしまつた。これに懲りて以後得意の自轉車乘りも遂に見られなくなつた。

斯ういふハイカラ振りを發揮された先生も、後には曾てのハイカラなどを想像することも出來ない平凡な容姿の人となられた。長い間自動車を用ひず、電車か人力車などを利用して居られた先生も、樞密院に出るやうになつてから、漸く自動車を利用せられるやうになつた。併しそれも勿論自動車屋に電話して送り迎へしたもので、決して道で圓タクを拾ふやうなこともせず、いつも高い代金を拂つて居られた。所が家族の方が「圓タクを拾ふと大變いゝ」とよく言ふのを聞かれて、時に圓タクを拾はるゝこともあつた。昭和五年夏樞密院の歸りに其圓タクに乘つて歸られたことがあつた。所が家人が出迎へると、滅多に見たこともない程のボロ〳〵の車で、而も修繕用の道具までチャンと座席に積み込まれて先生の席を穢してゐた。どうしてこんなボロ車に乘られたかといふに、「途中で降りやうかと思つたが、運轉手が是非送らせてくれと賴むから乘つて來た」との話であつた。勿論先生は自分の前へ一番先に通りかゝつた空車であれば、ボロ車であらうと何であらうと「一圓五十錢で池袋まで行け」との交渉だから、斯ういふお客に對しては運轉手も二つ返事で雀躍したのも無理はなかつた。

何處へ行くにも隨員をうるさがられた先生が、斯うして一人で圓タクを拾はれる情景が眼のあたりに見えるやうだ。

先生が萬年筆を用ひず、常に矢立を使用して居られたことも有名である。先生の日記は大正二年八月より起稿して、薨去の半年前卽ち昭和六年正月十五日まで十七箇年に亙つてゐるが、これが殆んど全部筆で記され、ペンを用ひられたのは昭和五年暮より翌年にかけて、僅々三箇月間に過ぎない。而してこの時漸くペンを使用されたのは、令嗣洵君の夫人が便利だと云つて、購つて勸められたものであつた。先生が何故便利な萬年筆を利用せられなかつたか。「萬年筆はどうもインクが洩れていけない」と口癖のやうに言つて居られたが、それはズット以前、このインクの洩れる萬年筆に懲りたからであつた。卽ち我邦では未だ萬年筆の非常に珍重せられた時分、明治二十五六年頃丸善に特に頼んで上等の萬年筆を一本需められた。而も大枚八圓も擲たれた物であつたが、如何せん當時の萬年筆はまだ非常にお粗末なものであつて、インクが洩つて到底實用に適せず、遂にこの文明の利器に長く匙を投げられたのであつた。

富岡鐵齋翁の畫　山川先生が京都帝國大學總長の兼任を解かれて同大學を去られるに當り、二面の扁額を同大學寄宿舍に寄せられた。その一は當時京都の畫家として有名な故富岡鐵齋翁に依頼することになり、先生自ら麁を枉げて之を懇請せられた。その畫は菜根で人常咬得菜根、則百事可做と題し、他の一面は孟子の中に記されてある

曾子曾謂二子襄一曰、子好レ勇乎、吾嘗聞二大勇於夫子一矣、自反而不レ縮、雖二褐寬博一吾不レ惴焉、自反而縮、雖二千萬人一吾往矣、

と大書せるものである。前者は蓋し會津藩祖保科正之公が狩野探幽に描かしめたもので、今に舊藩主松平子爵家に保存せられるものに倣はれたもので、學生に勤儉の意を寓示せられんとしたものであらうが、先生は之に對して翁を訪問し謝禮として酒肴料五拾圓を贈呈せられた。併しながら當時鐵齋翁と云へば畫壇の最高峰にあつたことゝして、若し正面から揮毫料として贈呈することゝすれば、可なり多額の金高でなければならぬであらうが、翁は先生が親しく翁を訪問して謝意を表せられたことを非常に感激し、更に菜根の畫に汪信民の傳を書いたものを先生に贈呈したのであつた。或人は之を評して、「何しろ先生はエライものだ、五拾圓で鐵齋に畫を二枚かゝせたのだからね！」と言つて笑つたものである。之も先生の古武士的德望があればこそである。先生の日記大正四年六月十七日の條に、

兼て頼み置きたる富岡氏よりの菜の畫を送り來る、依て學生監に托して寄宿舍に置く事とせり。

とあり、又翌十八日の條には、鐵齋翁の令息謙三氏が來訪せられたことを記して、

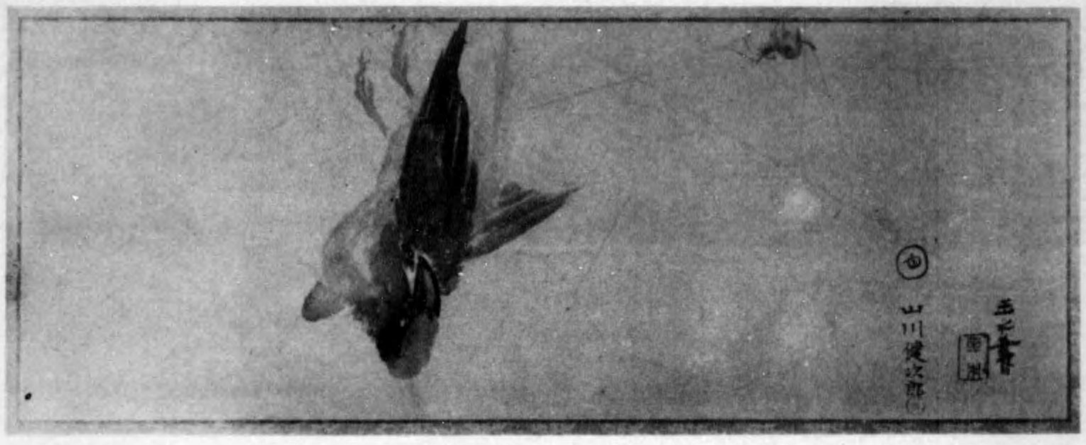
富岡謙三氏來宅、鐵齋翁に代り禮に來り、菜根の畫(汪信民の傳を書したる)一葉を贈らる。

とあるは卽ちこれを示すものである。

繪の序に更に一事を附記して置かう。先生が明治專門學校に寄贈せられる爲に、もと先生方に書生をしてゐた湯田玉水畫伯(玉水畫伯は後年帝展の委員として名を成したが、惜いかな若くして歿した)に、玄海灘の浪を描かしめられた。玉水氏は連日玄海灘の浪を知れる船頭を傭うて浪を研究し、苦心の後に漸く描き上げて先生に呈すると、先生は大に之を賞し、謝禮として金三十圓を贈られた。然るに畫伯は宿料や船頭に拂つた金丈けでも相當な額に上り、內心不足であつたものだから、「先生これでは……」と言ひかけると、先生は玉水が三十圓では多過ぎて辭退するものと早合點せられ、「マア取つておけ」と言はれた。案に相違の玉水も是に至つては二の句が續けず、いさぎよく敗退したといふエピソードもある。因にいふ、學校に贈られた是等の繪は何れも先生のポケットマネーから拂はれたものである。

先生が九大學生集會所に殘された扁額も寓意を含んだもので、同じく玉水の筆に成り、烏が蜘蛛の巢にひつかゝつてゐる圖で、油斷大敵の意を寓せられたものと曰はれる。傳ふところによれば、先生は初め看護婦集會室に掲げる積りで描かしめられたやうであるが、何等かのいさきつで、先生福岡退去後學生集會所に掲げられるやうになつたものらしい。その委しいことは判らないが、この繪には先生の自筆で「㊞山川健次郎」と確と署名せられるのを見ると、大に意味のあるものゝやうに思はれるのである。

九州帝國大學生集會所に於けるる先生生署名の扁額



（湯田玉水畫）

東北人の病氣　東北の或る小學校で先生が次の如き話を試みられた。

私も諸君と同じ東北人で、一つの病氣を持つてゐる。諸君の病氣も吾輩の病氣と同じであるが、我輩なども諸君位の若い時分に、この病氣を忠告してくれる人があつたら、其當時相當の療治をすれば癒つたかも知れぬ。併し誰も忠告してくれる人はなし最早痼疾となつて了つた。それで諸君には今改めて我輩が忠告するから、この病氣を全然癒してお仕舞ひなさい。その病氣は何かと云ふと、我々東北人は日本人でありながら日本語が出來ぬといふことである。これは寔に恥づべきことではないか。我輩などは若い時分氣がつけば癒つたものを、もう仕方がない。諸君は今よりその心懸で日本語を話せるやうにならなければならぬ。

先生が右の話をして自席に着かれると、縣視學・郡視學・小學校長等が押しかけて來て、「東北の發音はそんなに惡いものでせうか」の質問であつた。先生は卽座に之に答へて、「惡い所ぢやない、日本語ぢやないぢやないか」と話された。一同驚いて、「さうでございませうか」と互に顏を見合せたといふことである。

馬鹿の極彩色　曾て明治三十二年の頃、時の第一高等學校の生徒であつた藤村操といふ青年が、巖頭の感といふ遺書を認めて日光華嚴の瀧に投身自殺したことがあつた。この文が哲學者の言の如く見られた所から、時の思想家によつて色々の議論が試みられ、一時論壇を賑かしたものであつた。然るに先生はこの投身自殺を評して、斯くの如きは馬鹿の上の馬鹿な者のすることであるとて、よく「馬鹿の極彩色」と罵り、日本の穀つぶしだ、ソンナに死にたければ死ぬがよいと言はれたものである。

弔詞は死人に聽かせるもの　明治二十六年五月福島縣の吾妻連峰一切經山が噴火し、調査に出張した農商務省技師理學士三浦宗次郎氏が六月八日不幸にして再度の噴火のために死亡したことがあつて、その弔ひがあつた。時に先生は理科大學の教授として弔詞を讀まれたのであつたが、低聲娓々として殆んど衆に聞えなかつたので有名であつた。又曾て大正三年東京に發疹チブスが流行し、その治療に當つた東京帝大出身の若い二人の醫學士が之に感染して殉職したことがあつた。先生は太く之を不憫に思つて種々の配慮を加へられ、其追悼會が法科大學の教室に營まれ、先生も之に臨んで弔辭を讀まれたのであるが、その弔詞は既に記した如く、實に簡單にして而も要を得たものであつた。然るに其聲が餘りに小さくして殆んど誰にも聞えなかつた。或人が後に之を先生にたづねると、先生卽座に答へて曰く、「弔辭は死んだ人に聞かせるものである」と。成る程弔辭はその性質上會葬者に聞かせるものではあるまい。先生の一言一行が往〻人の意表に出る如くであつて、實はチャンとそれが道理に叶つてゐるのは、蓋し其天分の高きに依るものであらう。

大官の挨拶に知らぬ顏　先生が大學總長を罷めてやゝ閑散の身となり、諸方を講演して歩かれる途次、一日京都に入つて栖屋に宿泊せられた。友人・知己・門人等が先生を訪問して久濶を敍せる者が少くなかつたが、其中に京都府選出の前衆議院議長の奥繁三郎氏があつて、鄭寧に挨拶を述べた。然るに先生は例の通り何にも云はずに煙草を吸ふのみで遂に一語も交へなかつたから、相手も張合がなくなつて、直ぐ其まゝ歸つて了つた。是に就て思ひ出されることは、曾て西鄕從道伯(後の侯爵)が所用あつて初音町の邸に尋ねて來た時、先生は俺には用がないと言うて遂に會はれなかつた話である。後で考へると、それは伯が先生の令妹捨松君を大山巖將軍(後の公爵)に仲人の爲にやつて來たのであるが、始め書生が伯の名刺を先生に差出すと、先生はこんな人は俺には用がないと言つて返された。伯は先生には御用がなくとも私には是非お目に懸りたい用があると今一度賴んだ。書生が更にその意を通じると、先生は大方人違ひだらうと言はれた。依て書生がその旨を伯に告げると、伯は門の處へ行つて表札を見ると、成る程山川健次郎とあるので、兄君浩將軍(後の男爵)と間違つて來たことがわかつて、是に於て伯は失禮しましたと謝して還つたといふことである。斯ういふことも先生にして初て出來ることかも知れぬが、先生が高位高官の人と雖も普通人と同等に取扱つたことがわかるであらう。又曾て故鳩山和夫博士が衆議院議員の候補者として立つた時、戸別訪問として先生の邸を訪うたことがあつた。先生は選擧はこちらの自由であるとて書生(後の畫伯故湯田玉水)をしてその申出を謝絶せしめられたことがあつた。時にその書生は會津辯丸出しで斷つたから、氏もその意を解しなかつたものか、笑つて歸つたといふことである。

敵を尊ぶ　日露戰爭當時我が國民の敵愾心の發する所、新聞などで敵將アレキシーフのことを軋轢死夫、マカロフのことを負露夫などともぢつて中傷的に書き立てたものである。先生は之を見て、如

何に交戰中と雖も、斯ういふことをやるものではない。我が國の武士道を以てすれば、戰爭などの時には別して敵を尊んでやらなければならぬ。昔吾々の祖先は、戰場に臨んで敵と相戰ふ場合にも、敵將を呼ぶに決して名を呼捨てにはしなかつた。必ず某殿と敬語を入れて呼んだものであるとて、このやりかたをたしなめられたものである。先生の如きは實によく武士道の骨髓を得られたものといふべきである。

邸の設計　池袋の邸は先生の好みによつて出來たものであるが、或時知人の某工學博士が訪づれて之を批評して、「建築學上より云ふと、家といふものは空から見ても形が安定してゐて、全體の恰好と感じが……」とやり出した。先生は之を皆まで聞かずして曰く、吾輩の家はトンビや烏に見せるんぢやない、トンビが笑つたつて自分さへよければそれで構はんと。先生が住宅についての考などは極めて大まかなもので、所謂貴族的の設計などはテンデ眼中になかつたものである。採光の關係や、衛生上便利上等總てが實用的であることを眼目とせられたのである。されば既に記した如く、先生の二階の應接間にせよ、居間にせよ、殆んど何等の裝飾的設備もなければ、又高貴な何等の飾物も書畫もなく、全く簡素そのものであつた。又その庭園も、芝生のあるにあらず、奇樹珍木のあるにあらず、花壇といふ程の花壇のあるにあらず、唯雜然とそこ〻に樹木のあるのみであつて、所謂通常の庭園とその趣を異にする。斯ういふ方面の趣味は全然持たれなかつたのであり、又持たうともせられなかつたのである。先生はどこまでも學究的生活を以て終始せられたのであつて、晩年教育行政方面に專心せられたけれども、尙先生の眞髓は飽くまで一學究的生活を送られたもので、讀書は決して一日も之を廢せられず、淸貧に甘んじて居られたのである。

先生の讀書　先生は元來物理學者として立たれた丈けに、理學の方面に造詣の深かつたことは申すまでもない所であるが、また漢籍をもよく讀まれ、特に歷史には特別の興味を有つてよく歷史に關する書を愛讀せられたものである。先生が如何に漢學に對する趣味が深かつたかは、文學博士井上哲次郎氏が先生の追憶談に述べられた中に、今日は專門の學者でも餘り讀まぬ郁離子（元末明初の劉靑田の著）を先生が讀まれたことを感心してをられるのでもわかるが、曾て東京日日新聞に寄せられた故根本通明翁の論語講義に關する意見の如きは誠に堂々たるものである。而して先生は極めて記憶力がよく、一度目を通されたものは大抵覺えてをられたことは眞に驚くばかりである。而してその國史上の事柄に就ても、常に大義名分を重んじ、武士道的修養に關することを好まれたものである。軟かい物ではよく道中膝栗毛や滑稽和合人・七偏人・名所圖會の類を好んで讀まれたといふことである。又洋書は若い時代には語學練習の爲に小說類を讀まれたといふが、後に專門の理學に關するものは勿論、博く新聞・雜誌・著書等によつて歐米の最新知識を採り入れられ、特に歐洲大戰爭以後社會主義思想の澎湃として我が國に入るやうになつてからは、一層深き注意を此方面に注がれ、マルクス主義の書

や飛行機研究に關する書を丸善から求められて熟讀せられたものである。嘗て先生は「我が國の社會主義者をば、金をくれてどし〳〵外國に見學にやるがよい、彼等は歐米の國體や社會の實際の事情を知らずして、徒らに西洋社會主義者の言論のみを見てゐるから、その主義にカブレて我が國にも之を適用せんと企てるのであるが、西洋の實際を見學して、之を我が國體又は社會と比較して見ると、初て我が國家社會の大に優秀なる所謂を理解し、やがては西洋カブレの社會主義を拋擲するに至るであらう」とよく言はれたものである。それで先生は時々冗談的に、「よく我輩のことを如何にも舊い舊いといふやうであるが、その實吾輩程最新知識に通じてゐるものはないであらう」と酒間に語られたものである。先生は早く米國に學ばれたから英語に達せられたことは云ふまでもないが、又獨逸語にも通じ、佛蘭西語にも堪能であつた。帝大に於ては佛蘭西語の教科書を用ひて教授せられたものであつて、外國語にはよく通じ會話も極めて達者であられた。然し先生は專門以外の事柄に就ては極めて謙遜で、決して知つたかぶりはせられなかつたが、常識の極めて圓滿な發達を遂げられた方丈けに、大抵の事は人並以上に心得てゐられたのである。先生は時折、吾輩なども米國から歸つて來た當時は英語で教授をしたものであるが、今は會話も出來なくなつたなどと語られたこともあつたけれども、英語の會話はナカ〳〵御手に入つたもので、曾て先生が武藏高等學校長時代に、英人某氏を教師として傭入られた所、某氏の初登校の日は偶〻先生の出勤のない日であつたから、某氏は先生を私邸に訪問して新任の挨拶をすることゝなつた。時に學校側としては、先生は勿論會話に事缺かれるやうなこともあるまいけれど、念のため萬一の時は通辯の勞を執るべく某教授が案内旁〻某氏と共に先生邸に到り、先生に紹介したものであつた。然るに先生の會話は誠に流暢で些の滯りもなかつたので、某教授も驚いて歸つたといふことである。併し先生は何故か帝大總長時代には、外人の來訪の時は通譯をつけて會見せられたといふことである。

先生が記憶力の非常に勝れてゐられた一例として、先生の舊友故加藤寛六郎翁が曾て次のやうなことを話された。卽ち翁が福島農工銀行頭取時代に、先生は東北帝國大學理學部新設の要件を帶びて仙臺に出張せられることがあつた。其節福島にて翁は舊友高木盛之輔氏と共に先生を請じて一夕の宴を張り、酒酣にして翁は先生のすゝめにより羅生門の謠をうたつた所が、「つはものゝ交り、賴みある中の酒宴かな、とりどりなれや梓弓」に至りてフト胴忘れして續かなかつた時に、先生は「やたけ心の一つなる」ではないかと注意してくれられたので、幸にあとを續けることを得たが、この時翁はつくづく先生の博覽强記なるに驚いたと機會ある毎に語られたことであつた。

先生の和歌　先生の和歌と題して特記することは、固より先生の好まれる所ではあるまい。併し先生は東京帝大理學科長時代に在職二十五年の祝賀のことがあつて、席上先生が和歌を以て謝辭を述べられたことは既に記した所である。その後昭和二年十二月樞密顧問官子爵石黑忠悳氏から「秋老小園

荒、勁風傷草木、山翁何苦心、擁護一株菊」といふ詩を寄せられたに對し、先生は次の歌を以て返された。

守らはや又たくひなき日の本の民の寶の菊の一と本

又彼の大正十二年難波大助の大逆事件のあつた時、先生はこれを聞かれて、

日の御子は神にしませは醜のをのまかことはたすすへあらめやも

と詠まれた。先生が憂國の至誠は常に到る所に現はれてゐるのである。

男爵山川先生傳 終

正誤

第四章第一次東京帝國大學總長時代中に、先生が明治三十六年三月を以て學士會院會員を辭されたことを記したのは（一〇七頁）、事實相違してゐることを校了の後發見した。この時先生は本文にも引用した如く、時の院長男爵加藤弘之氏に充て辭職願を出されたのであつたが、これは聽届けられず却下せられた。併しながら、先生としては素意に戻るので、そのまゝ會員に留まつてゐられたものゝ、直接關係を絶つてゐられたものと見える。よつて本文起草の折はこの時辭職せられたものとして書いてしまつたのである。併し右の次第で先生は依然會員であつたので、明治三十九年六月十二日を以て東京學士會院が組織を改めて帝國學士院と改稱せられるや、引續き勅旨を以て帝國學士院會員を仰付けられたのであつた。併し先生は先に提出せられた辭退願と同樣な趣旨で、間もなく十六日附を以て、時の文部大臣牧野伸顯氏に充て辭退願を出されたのである。蓋しこの改組に際して辭任せられることが一層適切な機會と考へられたのであらう。その時の先生自筆の書狀が今帝國學士院に保存せられてあつて、左の如きものである。

拜啓仕候、陳は拙生事舊東京學士會院の會員に御座候砌、當時の境遇全く廢學するの止むを得ざる場合に付、同院の一座席を滿たし居り後進者の進路を塞ぎ居り候は心安からざる次第に付、一昨年か當時の院長加藤博士に辭任書差出だし候處、何分詮議不二相成一旨にて却下相成候儀に御座候ひき、然る處近比承候へば、谷子爵

正誤

（干城）の辭任は聞屆に相成候由、然らば拙生の素志も貫徹仕候樣相願度存じ、別帋差出だし候、勿論別意有レ之には無レ之、前記の次第に御座候、右は早々願用迄如レ此に御座候、不備、

六月十六日（明治三十九年）　健次郎拜

牧野殿　侍史中

是に於て遂に先生の辭任が聽屆けられ、明治三十九年十二月二十二日を以て帝國學士院會員を免ぜられたのである。この點茲に訂正す。

昭和十四年十二月二十日印刷
昭和十四年十二月二十五日發行

故男爵山川先生記念會　男爵山川先生傳　非賣品

發行者　代表者　中村清二　東京市小石川區指ヶ谷町五九番地
編纂者　花見朔巳　東京市小石川區原町一二〇番地
印刷者　島連太郎　東京市神田區美土代町一六番地
印刷所　三秀舍　東京市神田區美土代町一六番地

（鈴原製本）

II-3V-21

終